

## 創部六十周年に寄せて

Oct. 1, 2016

金沢大学理事（副学長） 柴田正良

金沢大学テニス部創部六十周年、まことにお目出とうございます。

私自身は、残念ながらテニスには縁がなく、これまでラケットを握ることすらありませんでしたが、最近のテニス界、とくにリオで開催されたオリンピック、パラリンピックでの日本選手の活躍には、これまでになく熱いものを感じさせられました。改めて、日本のテニスの歴史を紐解いてみると、戦前には日本テニスの黄金期と呼ばれる時代があり、そこには、96年前にオリンピックで銀メダルを獲得した熊谷一弥や、ウィンブルドンで決勝（現在の準決勝）にまで進出した清水善造、世界ランキング3位まで登り詰めた佐藤次郎など、世界で華々しく戦った選手たちの名前を見ることができます。そして、戦後やや低迷の続いた日本のテニス界は、いままた、女子ともども、新たな活動期を迎えているようです。

もちろん、そうしたトップレベルの選手の活躍を支えているのは、裾野の広いアマチュアの集団であり、中でも大学のテニス部やテニスサークルの存在は欠くべからざるものでしょう。それは、ひとえにテニスだけに限りません。それどころか、大学の体育系のクラブやサークルは、体育という授業科目をとことん「薄めて」しまった日本の大学にとって、教育上の重要な役割を果たすものともなっています。もっとも、昨今の国立大学への運営費交付金の仕組みでは、この教育上重要なクラブやサークルの施設整備さえままならないのが現状ですが……

さて、本学は、一昨年、平成26年に大学独自の人材育成方針、金沢大学＜グローバル＞スタンダードを策定し、いまやグローバル人材育成に教育のすべての力を注いでいます。しかし、グローバル人材とはなんのでしょうか？ それは、知識や語学力というよりも、態度、とりわけ「他者と共生できる態度」を備えた人物ではないのでしょうか。そして、そのような態度を培い、日々の活動の根底である体力を育んでくれるものは、様々なスポーツ活動に他なりません。その意味で、本学のテニス部には、今後とも本学の人材育成の重要な一環を担って頂くことをお願いして、六十周年のお祝いの言葉とさせていただきます。